

## 令和2年度 第4回 藤沢市市民活動推進委員会 議事録

### 1 日時

2020年（令和2年）11月14日（土）午前10時2分～午後1時7分

### 2 場所

藤沢市役所本庁舎7階 7-1会議室

### 3 出席者

(1) 委員 10人

山岡委員長、坂井副委員長、林委員、樋口委員、阿部委員、細沼委員、西上委員、  
間山委員、原田委員、鎌倉委員、

(2) 市側 5人

福室参事、藤岡主幹、一瀬主査、浅野主任、緒方主任

(3) 協働コーディネーター 2人

特定非営利活動法人藤沢市市民活動推進機構 手塚氏、堀氏

(4) 傍聴者 6人

### 4 議題

(1) ミライカナエル活動サポート事業協働コースの審査会（プレゼンテーション）について（一部非公開）

(2) 令和3年度の取り組みについて

### 5 配布資料

(1) ミライカナエル活動サポート事業（協働コース）プレゼンテーション（冊子）

(2) ミライカナエル活動サポート事業（協働コース）コース説明及び審査選考・評価項目等

- (3) ミライカナエル活動サポート事業（協働コース）プレゼンテーション予定表
- (4) 令和3年度に向けた取組みについて

## 6 開催概要

### 開会

○事務局より、藤沢市市民活動推進委員会、及びミライカナエル活動サポート事業審査会の成立に関する報告が行われた。また、審査会の日程等の他、審査会における審査選考の内容については、藤沢市情報公開条例第6条第3号に基づき、非公開となる旨、報告が行われた。

○ミライカナエル活動サポート事業審査会の各委員から自己紹介が行われた。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

### 議題（1）ミライカナエル活動サポート事業協働コースの審査会（プレゼンテーション）について

(山岡委員長) それでは、大変お待たせいたしました。これより公開プレゼンテーションを行っていただきます。

1番目、「行政との協働コース」の特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやいさんです。「孤立状態にある人と共に生きるための畑づくり」について発表をお願いいたします。

(特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい（以下、「自立生活サポートセンター・もやい」という。)) 特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやいと申します。私、交流事業を担当しておりますスタッフの松下と申します。本日はよろしく願いいたします。

本日は「孤立状態にある人と共に生きるための畑づくり」ということでお話をさせていただきます。

まず、もやいについてご紹介させていただきます。もやいは2001年4月、東京都新宿区にて設立しました。当初はホームレス状態にある方のアパート入居時の保証人を引き受けておりました。そこから、その方たちの生活相談とか、孤立化を防ぐための交流事業、あと、2番目にあるとおり、もやいは貧困問題を社会的に解決するというミッションがありますので、広報・啓発活動などを行っております。

もやいは年間延べ4,000件以上の方の相談を受けています。今までに延べ2,6

00人の方の保証人、現在は減っているのですけれども、500人弱の方の保証人を現在も引き受けております。さまざまな方の相談を受けておりますが、家族や社会から孤立されている方が多くなっていると感じております。

経済的な支援は、生活保護なり、行政などの支援がふえてきていると思うのですが、社会的な孤立に向けての支援はなかなかふえてきてない、少ないということを感じております。また、これは私が担当しております交流事業の課題であるとも考えております。そこで、孤立状態を抜け出すための新しい交流モデルをつくりたいと思っております。

孤立状態にある人に何が必要なのかと考えたときに、孤立状態にある人は、ご家族であつたり、仕事のところとかで、結構傷つかれた経験のある方が多く、関係性を築くのにかかると感じております。なので、長く継続的にかかわれる居場所が必要であると思っております。また、長く継続的に居場所にかかわっていただくためにも、役割を持つことで関係性が築きやすくなると考えており、それによって継続的にかかわりを持つことができるのではないかと考えております。そこで、もちろん参加していただくことも大事なんですけれども、居場所での役割が必要ではないかと考えております。

そこで、畑を通した居場所をつくりたいと思っております。孤立状態にある人に、畑という居場所をつくる。

2番目の「『畑』は『畑』そのものが居場所になれる」は、すごく抽象的でわかりにくいかもしれませんが、居場所はもちろん人との関係性も築けるのですけれども、そこにある野菜だったり、その成長を見守ったりと、人を介さない、場との直接的な関係性が築けるのではないかと考えています。

畑を通してつながることもできるし、逆に孤立状態にある人が社会に参加する場を生み出し、孤立状態の解消とか、行く行くは地域の活性化が図られるのではないかと考えております。

なぜ畑なのかというところは、個人的に畑にすごく興味があったというのもあるのですが、2017年5月より、もやいでも「もやい農業部」として、いろいろなところではないのですけれども、3カ所ぐらいの畑をされているところのお手伝いをさせていただいております。その経験から、畑で参加者がすごく変化するというものを感じておりまして、それが畑の居場所をつくりたいという理由になっております。

具体的事例としては、一緒に外出し、畑で作業することで、参加者同士の関係性を築ける。これは私ども交流事業でサロン・ド・カフェこもれびというサロンをやっている

のですが、サロンのお客さんが、その場で畑の楽しさとか、「きょうこんなことをやって、こんなものを採ってきたんだよ」ということを話してもらうことによって、そこで参加者を募るといふか、利用者自体、参加者自身が広告をしてくれて、より参加して、どんどん輪が広がっていくというのを感じております。

また、スタッフであろうと、参加者であろうと、一緒に野菜を収穫したりすることで、達成感を共感できます。それによって、目に見えない絆みたいなものができているのではないかと感じております。

もっと具体的に言うと、もやいに来られる方の年齢は、20代から70代までさまざまな方が来られておまして、もちろん障がいのある方もいて、高次脳機能障がいがあつて半身が動かない方でも、草むしりとか、できることをやっていただくという形で参加していただいております。年齢や条件などの縛りのない居場所にもなれますし、いろいろな能力に合わせた役割をつくれるのも畑の魅力だと感じております。

そして、今現在、コロナ禍の状況で、私の担当している交流事業的に、なかなか活動が制限される中で、畑は新しい生活様式の中で三密にならない居場所になれると思っております。

「なぜ藤沢で実施するのか」というところは、2017年の段階で、もやいが農業部をつくりたい、畑をやりたいというお話をしたときに、一番最初にNPO法人農スクールの小島さんのほうに相談させていただきました。それがきっかけで、一番最初に、2017年5月の段階で、もやいが農スクールさんに3カ月ほどお邪魔させていただいたといふか、作業のお手伝いをさせていただいたという形です。

藤沢市はともかく農福連携に力を入れている。今回の畑をやりたいということを農スクールさんに相談させていただいたとき、農スクールさん経由で畑を貸していただいて、農作業も教えてもらえる。また、互いの参加者のニーズに合わせて連携することができるということで、いろいろ力をかしていただける状況にあります。

また、何より今回このような機会をいただいて、藤沢市と協働させていただけるという機会がとても大きくて、幅広い地域住民の方や地域の団体の方の参加への周知を図ることができたり、立場や分野を超えた孤立防止の居場所として、地域で活動できるということがとても魅力的で、逆に藤沢市じゃないと、今回この状況は始められなかったのではないかなと考えております。

「藤沢市と協働したい理由」。もやいは、とてもいろいろな方の相談を受けているの

ですが、孤立状態にある人とその方の問題を解決していくためには、地域に根差した活動が必要であると感じております。

もやいなどの1つの団体でできることはとても限られております。また、もやい自身が首都圏で都心から1時間半圏内の方の保証人などを行っているので、結構幅広い地域で活動を行っているため、なかなか地域に根差す活動が行えていないという状況があります。なので、ノウハウもない。

藤沢市と今回協働させていただくことで、地域に根差した継続した活動を行うことで、横連携のできる信頼される新しい交流モデルになるのではないかと考えております。

今回、地域包括ケアシステム推進室様とご一緒に、協働させていただくことによって、もやいが地域包括ケアシステム的一端を担う。そして藤沢市の行政、各団体などで行き来をすることによって、参加者、利用者さんが、畑経由で、さまざまな地域包括ケアシステムに乗ることもできるし、逆に、どこかの団体で地域包括ケアシステムに乗った方が、畑のほうに参加していただく、その行き来ができるようなシステムになると考えております。

先ほども申し上げましたが、畑での活動というのは孤立状態の方に向けて行いたいと考えている関係で、長期的に、1年以上かけないと結果がなかなか出ないかな。その中で、継続的に運営できる仕組みづくりというものはとても考える必要があるかな。それなくしてはならないかなと考えております。

なので、畑の応援隊を募り、畑の収穫イベントとか、畑の通信などを受け取れるようにしたいと思っています。あと、収穫体験、調理実習など、畑でのイベントを開催したいと思っています。

ここで、一緒にやる牧野のほうから一言もらいたいと思います。牧野と申します。もやいの、自立とはつながりの中で生きることという活動理念に賛同して、3年ほど前からボランティアをさせていただいております。

もやいの畑事業に参加させていただいて、自然と会話が生まれたり、目に見えない絆が生まれることを感じて、畑の作業というのはすごくいいものだと思っています。今回、藤沢市と協働できる機会をいただいたので、藤沢市と活動できることを楽しみにしております。

(藤沢市地域包括ケアシステム推進室) 藤沢市地域包括ケアシステム推進室の小野と申します。

1つだけ。資料の藤沢市として「期待すること」というのはおこがましいですね。一緒に目指したいと思っています。畑であり、居場所である、そういう新しい居場所をつくっていきたいと思っています。よろしくお願いします。ありがとうございます。

(山岡委員長) ご発表ありがとうございました。

それでは、ただいまの発表に対して、委員の方からご質問等ありますでしょうか。

(坂井副委員長) 発表ありがとうございました。

畑の広さというのはどのくらいをイメージされているのか。それから、延べ100人を目指すということですが、一度の参加者は何人ぐらいでやるイメージなのか、そのあたりを聞かせてください。

(自立生活サポートセンター・もやい) 畑は100坪貸していただく予定であります。

300平米ちょっとぐらいです。あと、参加者については、1回当たり8人ぐらいを目指しております。なので、月1回であっても、多分100人は超える感じなのかなとは思うのですが、100人ぐらいを目指しております。

(坂井副委員長) 今後の取り組みとして、当事者主体の運営ということを掲げられているのですが、当事者というのは参加者のことなのでしょうか。

(自立生活サポートセンター・もやい) はい、そうです。

(坂井副委員長) それから、目標は延べ100人ということとか、継続できるようにということなんですが、成果指標というか、どのくらい達成できたかを後で評価するときには、そういう数字が指標になるということではよろしいのでしょうか。

(自立生活サポートセンター・もやい) 指標になるとしたら、参加者の人数と、実際にやったことと、あと、畑の参加者とは別に、イベントの参加者という形の指標と、あと、応援隊を何人の方に賛同いただいたかというところを指標にしたいと考えております。

(坂井副委員長) その応援隊ですが、どのような形で募っていかれようとしているのかをお聞かせいただきたい。

(自立生活サポートセンター・もやい) 応援隊は、藤沢でこういう活動をしているので、畑とかに遊びに来ませんか、イベントとか一緒にやりませんかという形でご紹介させていただいて、可能であれば、応援隊になってくださいという形のステップで募集していきたいと思っています。もちろんそれは地域包括ケアシステム推進室のほうと相談させていただいて、イベントでご案内をしていけたらいいなどは考えています。

(坂井副委員長) あと1点だけ伺います。農業もある程度の専門性があると思うのです

が、そういうのをちゃんと指導できるような体制にあるのでしょうか。

(自立生活サポートセンター・もやい) 農作業の件については、NPO法人農スクールさんのほうにご相談させていただいて、スーパーバイズとして入っていただくようにお話しはさせていただいておりますので、そこら辺は農スクールさんの指導に基づいてやっていきたいと思っております。

(西上委員) プレゼンありがとうございました。

社会的孤立をテーマにしている点は非常にいいなと思って聞いていました。

あと、これはつくったものを売る方向を最終目的にしているわけではなくて、土や植物に触れることが大事だということですよ。だとすると、今後、地域のどういうところと連携するのが非常に重要になってくると思っています。その連携先が、地域はパワーポイント上にはふわっとしか書かれていなかったの、具体的にコネクションはまだなくてもいいのですけれども、どういう系統の地域の人たちと連携したいかというのがありますでしょうか。

(藤沢市地域包括ケアシステム推進室) 「地域の団体」と書かせていただいているのは、さまざまな地域の方、この周辺の地域住民の方はもちろん、あとは、このあたりの例えば地域の団体、まさに自治会さんとか、民生委員さんとか、地区社協さんとか、そういった方々にもぜひ一緒に支援者として、もしくは一緒に何かをする参加者として、取り組んでいけたらと思っております。

あとは、専門の相談機関、例えば包括さんとか、その他のいろいろな機関の方にも、この取り組みを知っていただいて、いい形でいろいろな方に参加していただきながら進めていければいいのかなと思っております。

(西上委員) 畑をアーティスティックに見せたり、デザインとして美しく見せるということが今後の賛同者をふやす最大のポイントだと思うのです。なので、美しさや、おしゃれさや、アートみたいな部分を一緒に考えていかれるといいのではないかとあって、そちらの方面もぜひと思ったのです。すみません、何かアドバイスみたいになってしまいました。

(藤沢市地域包括ケアシステム推進室) ありがとうございます。

(樋口委員) 発表ありがとうございました。2点あります。

ここにおつなぎしたい人としてイメージする人は私も何人もいるのですけれども、この場は長く継続的にかかわれるところですが、長く継続的に定期的に行けない人たちが

多いかと思うのです。そこで、どういうスケジュールというか、どういうふうに関口をあけて、いつでもどうぞというふうにしているのかどうか1点目です。

2点目は、発表にありましたように、もやいさんの場合、居場所のこもればさんで、やったことを分かち合える場、話し合える場があるから、効果が出ているんだというか、その共有して分かち合う体験がこれには必要だとすごく感じたのですけれども、畑だけですか。それとも付随するこもればさんの居場所をつくる計画はありませんか。

(自立生活サポートセンター・もやい) 参加者については、もちろん今もやいに参加してくれている方も、毎月毎月、定期的に来ることは正直難しく、スタッフを入れて、平均的に8人ぐらいで回している感じなので、それはいつでもどうぞですし、自分の体調に合わせて参加してください。2カ月あくんだったら、2カ月あくことも含めて長期的にかかわるといふふうに考えています。

あと、こもればのような何か居場所をというお話があつたりとおり、今回は畑だけなんですけれども、野望としては、できれば、そういうふうにコミュニティの集まる場所みたいなものができていったらいいなというのはあります。それは最初から決めるというより、今後は当事者主体なので、当事者や参加者のほうからそういう話が来たときに、そういう方たちを中心に動いて、そういう場がくれたらいいな。もともどこもればもホームレスだったおじさんたちが、みんなでトンカチやりながらつくったものなので、そういうことができればいいなと考えております。

(阿部委員) 費用の大部分が交通費ということになっていて、2,000円×10名×4回となっているのですが、東京から皆さん来られるんですか。藤沢の住民の方なんですか。

(自立生活サポートセンター・もやい) 藤沢の方にも来ていただきたいと考えております。

(阿部委員) 10名というのはどういう算定ですか。

(自立生活サポートセンター・もやい) うちのスタッフが3人、ボランティアで参加してくれる人が3人と、当事者で来てくれる人が4人ぐらいと、あと藤沢のほうからもし来ていただける方がいたら。

(阿部委員) では東京のほうからも来られるということですね。

(自立生活サポートセンター・もやい) はい、そうですね。

(山岡委員長) 関連してよろしいですか。そうすると、もやいのスタッフの方は基本的



には東京という理解でいいのですかね。要するに、畑は日々の管理みたいなのがすごく必要で、例えば台風が来るぞといったら、すぐ直しに行ったりとか、日照りが続いているたら何とかとか、そういうことが必要だと思うのですけれども、基本的に通いで来られるとなると、その辺の畑の責任者というか、管理者みたいなのはどうなるのかなというのがちょっと気になったのです。

(自立生活サポートセンター・もやい) 農スクールさんのところを借りるので、農スクールさんと一緒にやるのですが、私は東京といっても町田ですし、今も、えと菜園さんのところに畑を借りて、週2~3回は行っている感じなので、私とかほかのスタッフが、通いにはなってしまいますけれども、行く予定にはしております。

そこら辺も、東京というと東京なんですけれども、最初はそういうふうにするのですが、行く行くは、できる範囲の仕組みは当事者の方と一緒にやっていって、そういうコアスタッフというか、コアでかかわってくれる人をつくっていききたいというのは考えています。最初はやらざるを得ないかなとは思っています。

(山岡委員長) よろしいですかね。

よろしければ、以上で質問を終了としたいと思います。自立生活サポートセンター・もやいの皆さん、ありがとうございました。

[発表者交代]

(山岡委員長) 続きまして2番目、「行政との協働コース」のフジサワキカクさんです。「# (ハッシュタグ) フジサワの高校生」について発表をお願いいたします。

(フジサワキカク) それでは、フジサワキカク、観光シティプロモーション課によるミライカナエルサポート事業「#フジサワの高校生」の発表をさせていただきます。

代表してフジサワキカク、村田が発表させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、私たちが今回「目指すミライ」は、藤沢を「高校生に愛される、青春を応援する街」、こんな未来を目指しています。

僕らは「藤沢は日本一青春が似合う街」だと思っているのです。数々のドラマとか、映画とか、アニメとか、小説の舞台になっているのはもちろんなんですけれども、この街には、江の島を初め、海を眺められる海岸のところとか、夕焼けがきれいな山とか、ほどよく発達した駅前とか、そして何よりも青春すること、ちょっと恥ずかしいことが許される懐の深さみたいなものがあると思っています。つまり、この街というのは青春

時代を過ごす高校生にとって本当に最高の場所だと思っています。

ただ、自分たちがそういう環境にいることは、高校生のうちはなかなか気づくことはできないのです。それというのは、私たち大人に比べて、高校時代というものや、この地域というものが、ほかの街や年代に比べてどうなのかということを知るきっかけがないのです。

でも、そんなのはもったいないと思っていて、せつかくこの街で貴重な高校時代を過ごしてもらうのだから、できるだけ多くの高校生に、この街で過ごす高校生活の価値というものに気づいてもらいたい。それを我々大人や街が提供し、応援する。そんな街は、高校生にとってもなんですが、大人にとっても魅力的なのではないかと思っています。

我々フジサワキカクは、去年から高校生に向けたSNSアカウントの開設や、高校生をモデルにしたポスターの撮影会やイベントなどを行ってきました。徐々に高校生の間で知られるようになってきたのですが、僕らが目指している街としての規模感というものとか、もっと街に根差したコンテンツというところに少し問題点を感じていました。

一方で、観光シティプロモーション課は、ご存じのとおり、藤沢のことを好きな人をふやすということさまざまなことを行ってきました。ファミリー層に対するリーチや愛着度というのは物すごく高まっているのですが、一方で、未来を担う10代へのアプローチに対して問題を感じていました。

そんなフジサワキカクと観光シティプロモーション課が協働して、藤沢を「高校生に愛される、青春を応援する街」にしたいと思っています。この2つはお互いの強み、弱みというものをしっかりと補完し合いながら、この「ミライを実現する」ための最高のパートナーだと思っています。

では、早速どうやってこのミライをつくっていくのかということです。大きくコンテンツ事業とサポート事業という2つのものをやっていきます。

コンテンツ事業は、高校生活というものを、僕らの高校生活でいいんだなというインスピレーションを与えるコンテンツを発信する事業です。これは「#フジサワの高校生」というロゴから発信していきます。

それと、サポート事業は、そのコンテンツ事業への資金的、環境的な支援を通して、藤沢に住む大人が高校生をサポートできるという仕組みを整えていきます。

まず具体的にコンテンツ事業の内容について説明させていただきます。

大きく分けて「気づく」、「知る」、「体験する」という3つに区分けをしたコンテ

ンツをつくっていかうと思っています。

「気づく」です。これはポスターや映像を中心に「私たち、何かいいな」と思ってもらえるようなことを目指します。

例えば四季に合わせて、高校生をモデルにしたポスターを、駅やお店などに貼っていきます。基本的には春夏秋冬、年4回。そうすることで、毎年楽しみになるような、「ことしの春、何が出るんだろう」というようなものを目指しています。

一方で、年に1回「フジサワの高校生」の Web フィルム。これは基本的には対外向けにつくるフィルムです。藤沢の高校生の魅力というものを前面に描いた Web フィルムを公開します。これは外で話題になるクオリティのものをつくることで、外で話題になって、「私たちってこんなによかったんだ」というふうに、改めて自分たちの価値に気づいてもらえるような Web フィルムです。

次に、「知る」コンテンツです。こちらはより具体的に街のことをもっと知ってもらおうというコンテンツで、SNSを中心に行っていきます。

例えば「フジサワ青春100」です。海でぼーっと「ひとりでエモる」とか、街でしゃぼん玉を吹いてみるとか、もちろん定番どころで、「ジュリアン」でカップルソーダを飲むとか、まだまだ高校生が知らないような藤沢でできることというのを紹介するムービーなどをインスタグラムで発信していきます。

さらには、「7373ラジオ」という本当に高校生に向けただけのメディアというのをつくっていきます。これはレディオ湘南と一緒に、インスタグラムとラジオの両方で発信していきたいと思っています。

最後に、「体験する」です。これは地元の企業と施設でしかつけれないような一緒にできる体験をつくりたいと思っています。

例えばえのすいのイルカステージを高校生バンドに提供するとか、遊行寺で一夜漬け合宿を開催する。

さらには、ビックカメラの壁面にプロジェクターで青春映画を投影する。みんなで芝生に寝転がりながら青春映画を見るとか、このような体験をつくっていきます。

具体的内容については、今後、実際に協働先と一緒に、その協働先でしかできないものをつくっていききたいと思っています。

次に、サポート事業について、副代表の沢田から説明させていただきます。

(フジサワキカク) これまで村田が話したコンテンツ事業を資金面で支える仕組みをつ

くり、より円滑にこの事業を進められるようにします。

個人からの募金とお店からの協賛、2方向で藤沢の高校生の青春を応援します。1年目は小さな規模から始め、2年目以降、全体の資金を賄える調達方法をとっていきます。

1年目の1つ目のサポート方法として、募金箱を設置し、個人から資金を調達します。高校生がふだん訪れることの少ない夜営業のバーや居酒屋に募金箱を設置することで、藤沢の不特定多数の大人たちが藤沢の高校生の青春を陰で支える仕組みをとります。

1年目の2つ目のサポートとして、カフェやレストランなど、ありとあらゆるお店に小規模の、数百円規模の協賛を募り、その店にステッカーを配ります。ステッカーを掲示していただくことで、より多くの人たちに「#フジサワの高校生」のプロジェクトのことを知ってもらいます。

賛同店の数がふえましたら、例えばテスト前の学割や、高校生限定メニューなど、合同企画等をコンテンツ事業の中で実施することで、より多くの大人、街ぐるみで、藤沢の高校生の青春をサポートする、そんな流れを整えます。

2年目以降、より力をつけた「#フジサワの高校生」のコンテンツをもとにしたメリットをもとに、協賛を幾つかつくり、複数のパッケージをつくって、大型の協賛を追加で募ります。1年目に実施した募金箱やステッカーの協賛は2年目以降も続けます。継続的に資金を調達することで、この街の大人が藤沢の高校生の青春をずっと応援している空気、文化、流れをつくります。

(フジサワキカク) 最後に、協働体制について説明させていただきます。

基本的には「#フジサワの高校生」というロゴ、名前、あとSNSのインスタグラムアカウントというものの企画運営を、フジサワキカクと観光シティプロモーション課と一緒に実行していきます。ただ、それぞれの強み、弱みというのはもちろん生かしながら行っていきます。

例えばフジサワキカクの場合、コンテンツ企画制作のノウハウです。あとは既に持っているコンテンツ、プラットフォームの提供、あとはサポート事業の営業活動です。

一方、観光シティプロモーション課は、もちろん企画も一緒にやっています。さらには既に持っている「ふじキュン」やホームページなどのコンテンツやメディアの提供、さらには、市という立場を生かした企画のPRです。あと、何よりも地域団体、会社、施設、個人とのつながりです。こういうのがあるよというつながりの提供や実際の交渉も行っていきます。このように、お互いの強み、弱みというものをしっかり補完しながら

ら、「高校生に愛される、青春を応援する街」というミライを目指していきます。

タイムラインですが、「7373ラジオ」という音声コンテンツと、「フジサワ青春100」という青春を応援するようなSNSコンテンツというのは、基本的に2年間継続して定期的に行っていくものです。春夏秋冬の年4回、高校生を主役にしたポスターの作成、そして年1回もしくは2回の頻度で対外向けのWebフィルムと、参加型イベントを2年間通して実施していきます。サポート事業は継続して1年目から行っていきます。

この事業は、一番の目的は高校生に、「あっ、この街いいな」と思ってもらうこと。高校生に喜んでもらうコンテンツをつくることです。ただ、この協働事業というのは、高校生に向けた街のブランディングでもあります。「この街で青春した高校生たちが、将来藤沢に帰ってきたくなるようなミライのミライを見据えた事業です」。

最後に、山西さんから一言いただきます。

(藤沢市観光シティプロモーション課) 観光シティプロモーション課の山西と申します。

先ほど村田さんからもありましたとおり、藤沢のシティプロモーションでは市民の方に街に愛着を持ってもらいたいというところを主眼に今7年目の活動をしております。

毎年、市民アンケートをとっているのですが、その中で、藤沢に愛着を感じていますかという質問に対しての回答が、やはり10代の年代の方が一番低いです。そういうところで、我々も若い方に対するアプローチに関して、チャンネルとかアイデアとかなくて悩んでいたところなのですが、今回フジサワキカクさんにこのようなお話をいただいて、一筋の光が差したような気持ちになりました。

我々はシティプロモーション委員会といいまして、いろいろな街を構成する主要な団体さんとのつながりもとても強く持っていますので、そういった方々と連携して事業を進めてまいりたいと思います。

本日は貴重なお時間ありがとうございました。

(山岡委員長) ご発表ありがとうございました。

それでは、ただいまの発表に対しまして、委員の方からご質問等お願いいたします。

(西上委員) プレゼンありがとうございました。

10代をターゲットにしている点は非常にいいなと思って聞いていたのですが、予算配分のところで質問があります。10代をターゲットにしているにもかかわらず、映像とポスターの制作のところに予算を一番割かれていますけれども、ポスターを見ま

すかね。10代の子たちが街でポスターをじーっと見ている姿というのはあまり見ないのですが、ポスターについてはどう思っているのでしょうか。

(フジサワキカク) 高校生なのに、コンテンツの制作部分の予算が高過ぎるのではないかというお話だと思うのですが、ここでは高校生に「このコンテンツいいな」、「このクオリティいい」というふうに、すごくいいクリエイティブのものをつくるということが今回結構大事だなと思っています。

ポスターは見ないのではないかというお話ですが、僕はふだん広告代理店でクリエイティブをやっているのですが、確かにそうなんです。見ないんですよ。ただ、それがおもしろいところかなと思っていて、地元の藤沢エリアというもので出していくと、意外に見てくれる。去年既に僕らは実際に高校生のポスターを出しているんですね。江ノ電に出させていただいたのですが、そこで見て、「あのポスターよかったね」みたいな反応を実際にいただいています。なので、普通に考えると、ポスターというメディアというのは、ご存じのとおり、かなり衰退してきているのですが、街に向けた取り組みとして、ポスターというメディアはむしろおもしろいところかなと思っています。

(西上委員) もう一つ、高校生のどういう人をターゲットにしていますか。オール高校生だと少し広いですね。

(フジサワキカク) 理想は全員の高校生なんですけれども、今回僕らが取り込みたいのは、言い方はありますが、意識がそんなに高くない高校生たちです。つまり、藤沢市のポスターというか、こうやっていることを、自分から情報を取りに来て、「私たち、こういうことをやりたい」と言う子たちよりは、本当にぼーっと、ぼーっとまで言わないのですが、そういうところにあまり興味がない子たちを引き込むというのが僕らの目的です。その子たち、高校生に刺さるコンテンツをつくっていくことで、例えば「#フジサワの高校生」のアカウントが2,000人とかいる。つまり、そういう高校生に対する2,000人に向けてのメディアを手に入れられるということにもなるのです。ですので、お答えとしては、そんなに真面目じゃない高校生という答えになると思います。

(西上委員) だとしたら、予算配分上、力を入れるところが少し変わってくるかもしれないとは思っています。取られてから多分考えることになると思いますけれど。

(フジサワキカク) 制作費というところはしっかり取りたいなという気持ちがあって、高校生だからといって、クオリティを下げるということは一切やりたくないのです。た

だ、この街だから、実際、広告宣伝費というのは、それほど取ってないのですけれども、実はそれはまあまあ多めです。

例えば最近、こことは違うオリパラさんとの企画で、インスタグラムアカウントで広告を出したのです。藤沢市内の高校生でインスタグラムをやっている人が1万3,000人ぐらいなんですね。そこにリーチする。4回ぐらい広告を見てもらうのに、実は1万円かからないのですよ。なので、実際のところ、広告費を抑えて、制作費でクオリティの高いものをつくっていくというのを結構やりたいなと思っています。

ただ、その中で、ポスターの配分と映像の配分というので、ポスターをちょっと下げたほうがいいのではないかというのは、確かにそうかもしれないというところではあります。

(阿部委員) 実際の藤沢の高校生がこの企画に参加するのですか。それとも皆さんがコンテンツだけ発表するのですか。

(フジサワキカク) 基本的には、本当にメインで僕らが扱っているものは、高校生に何かをつくってもらったり、高校生がポスターをつくりましたではなく、高校生に向けたブランディングなので、お答えとしては、僕らがつくったものを高校生に提供するというものです。

ただ、いやいや、それはやはり高校生にやってもらったほうがいいんじゃないかという声もあると思うのですね。でも、実はこういう取り組みをやっていく中で、やはりいいものを見て、「私は映像に興味があります。これはどうやってつくっているんですか」というのは実際に結構来ているのです。去年のポスターに協力してもらった子が、企画をやりたいと言って、実際に来年以降のメンバーに入る、そういう流れというのはつくれると思っています。

(細沼委員) プレゼンお疲れさまでした。

今のお話を聞いていますと、藤沢駅よりも比較的海側が中心の感じに受けたのですけれども、藤沢市全体で考えると、北部の地区も緑がたくさんで、魅力的なところはたくさんあるかと思うのです。海側は確かに魅力的なんですけれども、北部の高校生にしてみたら、そこももう少し工夫していただきたいかなというふうに感じました。

(フジサワキカク) それは僕が藤沢の鵜沼生まれ、鵜沼育ちで、南側の人間だから、今はそういうことになっています。基本的にそういう企画をする人間が偏っているからそうなっているのです。だからこそ今回、観光シティプロモーション課と協働することで、

そこに対するバイアスが薄まって、より藤沢全体のPRにしていく。なので、今後は山側も扱っていけると思います。でも、一回、高校生から「山側、海ねえぞ」というメッセージが来たことがあります。

(坂井副委員長) 2019年の3月に会ができたということなんですが、先ほどのお話の中にちょこっとありましたけれども、これまでどんな活動をされてきたのかというのを伺いたいです。

(フジサワキカク) 基本的にはまず「#フジサワの高校生」という名前とロゴをつくっています。これはもともとチャンネルというか、高校生に向けたタッチポイントがないよねということで、じゃ、藤沢の高校生全体をこういう名前で呼んでロゴをつくってしまおうということをやりました。まずアカウントをつくって、そのアカウント上で、例えば「モデルになりたい高校生いますか」というのを募集して、実際に高校生の写真を撮って、それをポスターにするという活動です。基本的にそれがメインでやっている活動です。

あとは、インスタグラム上で、「今ふじキュンが駅前にいるよ」とか、「自衛隊が何々やっているよ」とか、定期的に藤沢の情報というのをアカウント上で開催することをやっています。

あと、大きくはもう一つ、オリンピック・パラリンピック推進委員会さんが高校生向けに企画をやりたいという話を去年あたりいただいて、それで高校生を集めるところの支援とかも今実際に行っています。

(坂井副委員長) あと1点だけ。今は任意団体なんですが、将来は法人化するというような気持ちがあるかどうかということと、それから、ポスターは何枚ぐらいつくって、どこに貼ろうと考えていらっしゃるのかをお伺いたいです。

(フジサワキカク) この団体は、できれば非営利を目指したいかなと思っています。営利を目指すような会社というよりはNPO法人を目指したいと思っています。その理由は、これは例えば地元のところからお金を募って、しっかりと企画コンサルをやっている、正直、ビジネスにはなるとおもいます。ただ、このプロジェクトは街のブランディングのものなので、基本的にはNPO法人というのを目指しています。

ポスターを何枚ぐらいつくってどこに貼るのかということですが、何枚ぐらいというのは具体的には言えないというか、難しいところではあるのですが、理想的に目指しているのは、高校生たちがふだん通るところを網羅したいので、例えば江ノ電、J



R、小田急にそれぞれ2から4枚とかですかね。

ただ、さっきサポート事業についてのお話があったのですが、お店で貼ってくれるところにはどんどん貼っていきたくて、全体としては、「あっ、このポスター、藤沢に行くところあるよね」みたいな規模を目指しています。

(山岡委員長) よろしいですか。

以上で質問を終わりたいと思います。それでは、フジサワキカクの皆さん、どうもありがとうございました。

[発表者交代]

(山岡委員長) 続きまして、ここからは「行政以外との協働コース」になります。

3番目、NPO法人湘南クリーンエイドフォーラムさんです。「海ごみの再利用で持続可能な未来創り」について発表をお願いいたします。

(NPO法人湘南クリーンエイドフォーラム (以下、「湘南クリーンエイドフォーラム」という。)) それでは、NPO法人湘南クリーンエイドフォーラムと日本環境設計株式会社との協働による「海ごみの再利用で持続可能な未来創り」事業のプログラムを説明いたします。

私はNPO法人湘南クリーンエイドフォーラム代表理事の五十嵐と申します。隣が日本環境設計株式会社シニアマネジャーの高橋様です。よろしく願いいたします。

まず、この事業の背景と概要を説明させていただきます。この事業は、市民よるごみ拾いボランティア活動と企業のリサイクル事業を有機的にハイブリッドした画期的なプログラムです。

左上の写真をごらんください。これは平塚市の海岸の写真ですけれども、ふだんはきれいに見える海岸も、台風や低気圧が通過すると、海中に漂っていたり、沈んでいたごみが海岸に漂着します。

世界全体の話をしてみますと、2050年には、海のプラスチック量は、世界の魚介類の総重量よりも多くなると言われています。もしかしたら皆さんが海に行ったときに、たまたまきれいな海岸を見られたかもしれませんが、相当量のごみが既に流出しており、新たに発生するごみの量を抑制することが世界的に喫緊の課題となっております。

一方で、海に流出したプラスチックごみは、有効活用すれば資源として再利用できます。年間に数千万ドルの価値を生むと、イギリスのNGOエレン・マッカーサー財団は提唱しておりまして、経済的にも大きな損失を来しているということが言えると思いま

す。

そして、左上と右上の写真のように、ペットボトルは自然界に流出したごみの代表的な存在と言えまして、当プログラムでは、ビーチクリーンで拾ったペットボトルを、リサイクルの原料として使用する予定としております。昨年は、東京の河川で拾ったペットボトルごみを、ごみ袋にリサイクルして、G20大阪サミットの参加者へ配布したというような実績もあります。

左下の写真は、ペットボトルごみを洗浄、粉砕して、フレークという状態にしたものの写真で、これを中間原料のレジンペレットにいたします。そして、当該事業では、プログラムの一環として、一連の活動を通して環境保全や省資源化の大切さを藤沢市民に普及啓発いたします。

右下の写真は、先月行ったクラウドファンディングで使用した写真ですが、このときは回収した古着をリサイクルして製造したTシャツを、資金提供者へリターン・トゥーしています。その収益の一部を弊会に寄付してもらおうというような内容で実施しました。見事に目標額を達成しております。

ちなみに、写真のTシャツは、環境保全活動の一環というプレミアム感が付加されまして、1着8,500円の価値を生んでおります。逆にいえば、このような活動がまだまだ普及していないから、こうしたプログラムが成り立つわけで、リサイクルによる社会変容を進めることによって、このような活動は普通になるというような世界を私たちは目指しております。

次に、当該プログラムを実施する背景をご説明いたします。

右のグラフは、UNEP（国連環境計画）が2018年に発表した資料をもとにWWFジャパンさんが作成したのですが、これによると、日本人はアメリカ人に次いで2番目に容器包装のプラスチックごみを排出している国民です。

そして、左のグラフは、一般社団法人プラスチック循環利用協会様の昨年のデータをもとにWWFジャパン様が作成したのですが、日本のプラスチックごみの78%は容器包装系です。また、容器包装系のごみの中でペットボトルが3割前後を占めていると言われておりまして、当該事業ではペットボトルごみをターゲットといたしました。

次に、それらのプラスチックごみがどのように処理されているかを、日本プラスチック工業連盟様の昨年のデータをもとにWWFジャパンさんが作成した資料でご説明いたします。

日本のプラスチック製品の生産量は1143万トンで、そのうち252万トンは翌年以降も利用されていますが、それ以外の8割弱に当たる891万トンは年内にごみとして処理されてしまっています。そしてその中の16%は埋め立てや単純焼却され、残りの84%はリサイクルされていると言われておりますが、さらに、リサイクルの中身を見ると、56%を占める部分がサーマルリサイクル、いわゆるごみを燃やした熱を利用する火力発電などの回収方法です。

これは私たち一般の人が想像するリサイクルとは違うと思いますし、現に欧米ではこのような燃やして熱を得る方法をリサイクルとは定義しておりません。また、温暖効果ガスの排出削減というごみ問題とは違う大きな課題の改善にも反して、有識者からは批判を受けています。

昨年、環境省は、プラスチック資源循環戦略というプログラムで、2035年までにプラごみの100%リユースまたはリサイクルという目標を掲げましたが、当該プログラムはその方針のモデルケースとも言えます。

次に、当プログラムを実施することでのメリットのお話をさせていただきます。

まず1つ目ですが、当該プログラムは、国連が提唱するSDGsの7つの開発目標にコミットしております。具体的にはスライドに赤丸をつけた7つです。開発目標7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、開発目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」、開発目標12「つくる責任 つかう責任」、開発目標13「気候変動に具体的な対策を」、開発目標14「海の豊かさを守ろう」、開発目標15「陸の豊かさを守ろう」、開発目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」がそれに当たります。

当該事業での実際面での寄与は非常に微々たるものではありませんが、事業を通じた普及啓発で、藤沢市民へSDGsの浸透を図れるものと考えております。

次に、当該プログラムは、欧州を中心に政策化されているサーキュラーエコノミーにコミットしております。サーキュラーエコノミーとは、国連がSDGsを提唱する5年前の2010年に、イギリスのNGOエレン・マッカーサー財団が提唱した資源循環型経済のことで、環境保全や資源削減と経済発展を両立させた社会の形成をうたっております。

このスライドはサーキュラーエコノミーを7つの施策で説明した Monitor Deloitte 7 Types of CE Business Models の資料ですが、当該事業は、赤太線で囲った3つの事業にコミットしております。

具体的には「2. Industrial symbiosis」、「ある事業から出た廃棄物を別の事業の資源として連携・活用する事で価値を生み出すビジネスモデル」などを初めとした3つのプログラムにコミットしております。

ここまで当該事業の提案理由やメリットをご説明いたしましたが、実際の活動は、弊社団体が年間30回ほど行っているごみ拾いボランティア活動をベースに、その一部を当該事業の一環として実施し、活動では、参加者へマイボトルの持参を推奨するマイボトル・キャンペーン、あとは、ごみの動向を調査する。「調べるごみ拾い」を行って、ごみの低量化を図ることを実施します。また、参加者自身の啓発に役立つような普及啓発活動を行う予定でおります。

以上で終了いたします。

(山岡委員長) ご発表ありがとうございました。

それでは、ただいまの発表について、委員の方からご質問ございますでしょうか。

(阿部委員) 海洋プラスチックごみの問題は、大きな問題だと思っております。クリーンエイドさんがごみを収集して、分別して、ペットボトルだけを環境設計さんに渡すという構図でいいのですか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) そのとおりでございます。

(阿部委員) 廃棄物処理の問題は、法律的に非常に難しくてややこしい部分があると思うのですが、今集められたごみを皆さんが分別して、ペットボトルだけを取り出すということに対しては、法律的には問題はないのでしょうか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) ボランティアで拾ったものに関しては、行政なり、そういう機関に処理してもらうことがベースなんですけれども、拾った人が持ち帰ることに関しては、問題はないという認識でおります。

(阿部委員) 拾った人が持ち帰るということになっているわけですね。

ここで見ると、保管施設への保管料を払ったりしています。これは中間処理施設に頼んでいるということになるわけですか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) 日本環境設計様へはある程度たまった量のものをお渡しして、そこからリサイクルしていただくのですけれども、一定量がたまるまでの保管に関してはこちらの事業として支出を見込んでおります。

(阿部委員) それは行政的には個人の場所になるのでしょうか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) 藤沢市の処理場をお借りするか、藤沢市の企業、服

部商店様の場所をお借りするか、具体的にはまだ決まっておりませんが、今2つの候補がございます。

(阿部委員) そのお金というのはクリーンエイドさんが集めた資金から使うということなんですか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) それは今回の事業収支に運搬費として40万計上しているのですけれども、その中に入れ込んでおります。藤沢市の場合は、お金がかからないというようなことであらかじめお話をしておきまして、ゼロ円になります。

(阿部委員) 藤沢市は受け取ると言っているわけですね。

(湘南クリーンエイドフォーラム) はい。

(阿部委員) では、こちらの補助金が出ましたら、かなりの部分はその保管費用へ使われているということで、そういうことかなと思いました。

それと、環境設計さんにお伺いしますが、40万円をクリーンエイドさんのほうに寄付という形になるのでしょうか。それは原材料を買った形にはなりません。運搬費を肩代わりしているということにならないのでしょうか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) 資料の説明不足から生じた誤解だと思うのですが、環境設計さんのほうで支出しているという形の40万円でございます。その金額に関しては、環境設計さんで人件費がこれぐらいかかるということで、環境設計さん自身の資金を自分で使うということで計上しているものなんです。

(阿部委員) 運搬費の部分にも40万円が計上されていますね。これはどういうことですか。これはイコールではないんですか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) それは環境設計様ではなくて、今回のミライカナエル事業からの支出なんですけれども、服部商店様に協力をいただいて、ごみを搬送する分と、もしくは一時保管していただく分に予定している金額です。

(阿部委員) ということは、補助金というのはそういう事業活動に使う。ごみ処理の費用として使っていると考えていいわけですね。

(湘南クリーンエイドフォーラム) 40万に関しましては、ごみの回収、あとは保管分です。残りの60万に関しては、一般というか、ボランティア団体の運営費、資材、そういうところに充てる予定でおります。

(阿部委員) それと、リサイクルしたものが出てくると思うのですが、これは有償で買い取るのですか。今さっきおっしゃっていたのは、環境設計さんのほうから無償で配ら

れているのですか。

藤沢市なりが買い取る義務というのがありますかという意味です。

(湘南クリーンエイドフォーラム) それはございません。

(阿部委員) 買わなくてもいいということですね。

(湘南クリーンエイドフォーラム) 買っていただければうれしいですけども、それは見込んでおりません。

(間山委員) プレゼンありがとうございました。

プラスチックごみ以外を拾って回収する場合もあると思いますが、その処理の方法とか、その辺の費用負担も含めて、どうお考えでしょうか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) もう発表の時間がなくなつたのですけれども、この次の資料がありまして、回収に関しましては、かながわ海岸美化財団さんが神奈川県を一括管理しております。その活動の中の1つとして今回事業を行います。かながわ海岸美化財団様は、神奈川の自然海岸で拾つたごみに関しては、無償で回収・処理していただけますので、そちらの団体とも協働・協力関係を結んで行う予定にしております。

(西上委員) これをされて、きれいな海を次世代に引き継ぐという目標だと思うのですが、資料の中に普及啓発という言葉が幾つか入っていますが、予算上には普及啓発に関するものはどこに入っているのかなと思つているのです。

(湘南クリーンエイドフォーラム) こちらも先ほどのプレゼンで時間がなくて説明できなかったのですけれども、「調べるごみ拾い」というような活動を行ひまして、それ自身が参加者の普及啓発につながるものというふうに考えております。ごみを拾いながら調べるのですけれども、それによって、こんなにごみがあるとか、こんなごみが落ちているのはなぜかとか、こういうごみがなぜこんなところに落ちているのかみたいなことを参加者に考えてもらうというようなことを一つの目標とした活動なんです。ごみ拾い自体が普及啓発につながるということと、あとは、有識者を招聘して環境保全の普及啓発セミナーを行う予定でおります。

(坂井副委員長) 協働事業の期間が2年間終わった後の構想の中に、再生品の販売で得た収益金の一部を活動資金に充てていくということが書かれていますが、このあたりを具体的にお話しいただけますか。

(湘南クリーンエイドフォーラム) 今回クラウドファンディングの活動を最初にご紹介

したのですが、そういうことも一部考えておりました、この事業でできたものを、クラウドファンディングの商品にするということも1つの案としてあります。もう一つは、日本環境設計様が、独自にこういう活動を行っております。ペットボトルであったり、海洋ごみをリサイクルして、それをほかの企業に、今CSR活動が非常に活発ですので、そういう需要が多々あるようですが、そちらのほうに販売していただいて、そこで得た収益の一部を寄付していただくというようなことを考えております。

(日本環境設計株式会社) 補足で説明いたしますと、弊社は日本全国1,300カ所に衣類の回収のボックスを置いておまして、さまざまなアパレルブランドさんとの取り組みもあります。また、プラスチックや携帯電話のリサイクルを通じて、大手の企業様とのつながりもあります。一例を挙げますと、6月に、レジ袋の切りかえのタイミングで、JR東日本さんにエコバッグを50万部配布いたしまして、そこにも弊社の蜂のマークをつけております。

そういったつながりがある中で、藤沢の海岸で集めたペットボトルを原料にした製品化を実施しまして、販売する製品に提げ札をつけまして、こういった背景がある商品ですということで、普及啓発活動をするとともに、それを企業様に販売する際に、一部の収益を寄付としてお戻しするという形を考えております。

(山岡委員長) 協働事業ということなのでご一緒にやるということですが、ちょっと厳しい見方をすると、先ほど阿部委員からの質問にあったように、ごみ回収の部分はクリーンエイドさん、リサイクルのほうは環境設計さんという分業みたいに見えるのですが、環境設計さんは、ごみ回収の部分にはコミットするのかもしれないのか。するとすれば、どんなふうにコミットするか。あるいはクリーンエイドさんはリサイクルのほうにどのようにかかわっていくのかということをご教示いただきたいのが1つです。

もう一つ、回収したペットボトルを、通常の行政のリサイクルの流れに乗せるのではなくて、日本環境設計さんのほうに持っていくということのメリットは、先ほどの説明があった、通常のリサイクルだと熱回収がほとんどだけれども、こっちに持っていけば、ちゃんと再資源化ができる、そういう理解でよろしいですかね。

(湘南クリーンエイドフォーラム) 後のほうの質問が答えやすいので、お答えします。

今回行おうとしていることは、海岸で拾ったごみをメインのものに考えておまして、そういうものに関しましては、再利用しづらくて、大概は埋め立て、焼却処理されております。それを再資源化するということが今回の事業の画期的な部分があるというふう

に考えております。

最初のご質問ですが、分業の部分は確かにございます。ただ、有機的になっている。有機的というのは、環境保全活動として日本環境設計様にご参加いただいたり、日本環境設計様の知見を普及啓発に使用させていただくなど、そういうようなトータルとして一つの事業というふうに私ども考えておまして、それによって画期的な事業になっているというふうにご提案させていただいております。

(山岡委員長) よろしければ、質問は以上で終わりにしたいと思います。湘南クリーンエイドフォーラムの皆様、どうもありがとうございました。

[発表者退席]

(山岡委員長) 以上で全ての企画のプレゼンテーションが終了しました。

発表者の皆様につきましては、7月からの申請に始まり、今回のプレゼンテーション一次審査まで、事業構築の検討、それから協働先との調整など、大変なご苦勞があったと思います。一次審査通過後には、年明けに二次審査もございますけれども、引き続きご尽力いただければと思います。

いずれの団体の皆様においても本日は大変すばらしい発表をありがとうございました。

それでは、ミライカナエル活動サポート事業協働コース審査会における公開プレゼンテーションを終了いたします。

ここで事務局にお返しいたします。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(事務局) 山岡委員長、ありがとうございました。

本日の結果は、後日郵送にて通知をさせていただきます。

以上をもちまして本日の公開プレゼンテーションは終了となります。

委員の皆様は、採点表をご提出後、休憩をとっていただきまして、11時25分ぐらいから、引き続き本会場で審査会を行いますので、よろしくお願いいたします。

発表団体の皆様、傍聴者の皆様におかれましては、出口にてアンケート用紙を回収させていただきますので、ご協力いただけた方は、ご提出の上、お忘れ物のないように、お気をつけてお帰りくださいませ。この後、本会場を使用いたしますので、申しわけございませんが、速やかにご退席いただきますようご協力をお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。



[採点・集計]

午前11時18分 休憩

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

午前11時28分 再開

**意見交換及び審査会（非公開）**

午後0時8分 休憩

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

午後0時40分 再開

**議題（2）令和3年度に向けた取り組みについて**

○事務局より、令和3年度に向けた取り組みについて、説明が行われた。

(山岡委員長) それでは、今の事務局の説明について、ご質問やご意見をお願いいたします。

(原田委員) 今の説明を聞いてなんとなくわかったのですが、本来であれば、2020年度の結果報告をいただいた後に、2021年のこういう内容をお示しいただいて、こちらのご意見なのかなと思っていただのですが、そのあたりが、今後もう一度意見集約があるということだという認識で、現時点での意見を申し上げたいと思うのです。

これは1個ずつ言うのですか。全部の項目にあるわけではないのですが、どうしたらいいですか。全体を通しての意見でよろしいのか。

(山岡委員長) 順番に時間を決めてやっていくと、結構いっぱいありまして、1項目3分とかになってしまうので、お気づきのところについて発言していただくということでよろしいですかね。

(原田委員) 今、推進センターのほうで調査中というお話がありましたが、以前から私が申し上げているとおり、ウィズコロナという中で、いろいろな事業や団体のあり方をどう変えていくかというところを2021年度のほうにも反映していくべきだと思っています。以前、推進センターのほうで調査していただいた報告書の中で、多くの団体が、

団体の根幹的な部分への影響があると予測しているというふうにありますので、このあたりをどう捉えて2021年度の計画に活かしていくかというところを、最も活かしていただきたいということが1つです。

あと、コロナ禍の中で、できなかったことと、今後事業をやっていくときに、どうすればできるのかというところを整理していただきたいと思っていて、それを活かしていただきたい。

それと、コロナの中で、公共施設が使えなかったというところを考えていただいて、空き家活用であるとか、例えば住宅政策課のほうで空き家の事業をやられていますけれども、そのあたりと市民自治との連携の中で、公共施設だけではなくて、市民の家とかではないところで、地域の中で身近に使える場所をふやしていく。そのあたりの検討も、既存施設の活用推進の中で考え方を活かしていただけないかなというところが1点です。

少し戻りまして、「地域課題解決型NPO団体育成」というところなんですけれども、これも福祉分野に関して、特に高齢、障がい、子ども、貧困、介護とか、このあたりの解決型のNPOが国としても求められるところだと思うのですが、このあたりをいかにして見出して育成していくのかというところも考え方として入れていただきたいと思います。

あと、基本指針3で、「自治会町内会活動の先進事例及び課題の共有」ですが、ここも自治会がコロナ禍の中で動けなくなったことを、今後どうやって動かしていくかということと、あと、若い世代の参加というところに関して、リモートの仕事になって、参加できる層というのが出てきて、うちの地区もそうなんですけれども、そういうことも考え方の中で取り組んでいただきたいと思います。

あと、基本施策3-③「オリンピック・パラリンピックを契機とした共生社会の実現」で、「オリンピック終了後のレガシーの検討」です。ここについては、オリンピックが実際開催できるのかということもありますが、開催できたとしても、例えば市民交流ということが今まで検討されていたおりにできるかどうか。これができないとなったときに、オリンピックに絡めた事業というのが、市民活動の中で重要性を帯びてくるかどうか、このあたりも検討しなきゃいけないのかなと思っているので、それも1つ考え方をまとめていただきたいと思います。

最後に、地域包括ケアシステム推進室というのが役所の中にありますが、ここで、コロナ禍で自粛した後に、ひとり暮らしの高齢者の方への訪問を1,300件したという

話を聞きました。このあたりも、最初に申し上げたコロナ禍で何ができなかったのか、今後できるのかというところにつなげていくためにも、市民自治であったり、もしできればこの推進委員の方々との共有も必要なのかなと思っているので、例えば地域包括ケアシステム推進室にそのあたりの結果報告を書類か、ご本人にお話しいただくか、ここも含めて、協働で、これからのコロナと共存していく中での市民活動をいかにしていくべきかという調査の1つとしてできたらいいんじゃないかなと思うので、ご検討いただければと思います。

(山岡委員長) コロナのことに触れているところもあるけれども、そうじゃないところもありますし、ここで触れてないところも、できたこと、できなかったことを踏まえて計画に反映させていく必要があるということはおっしゃるとおりだと思います。

(鎌倉委員) 日常生活上で私が気がついたことなんですが、2-②のコミュニティ拠点です。最近いろいろ公園にかかわっているのですが、市役所のほうでは公園課というのがあるのですかね。ただ、公園も活用がまだ不十分というか、公園によって随分濃淡がある。しっかり整備されているところは、市とか、市の委託先がきちんとやってくさっているのか、地域の愛護会の方々がやっているのか知らないのですが、やってくさっているところがあるんですけども、差があります。その場合に、利活用で、安全性とか、衛生面とか、いろいろな点で問題もありそうな気がするので、その辺を均一化して、コミュニティとしての重要性をもっとアップしていただければいいかなと思います。

ただ、コロナ禍で、すべり台とか、ブランコとか、いろいろなものが封鎖されてしまって、今再開しつつあるのですけれども、その辺のルールづくりというのも、もう少ししっかりしてあげないと、不便かなという気がしております。いずれにしても大事なリソースなので、もう少し活用を注目していただいて、考えていただければいいかなというのが私の感想です。

もう一つは、次の3-①の人材です。これもいろいろ活動していますと、平日とかは、パワーのあるジェネレーションに参画していただけなくて、もったいないシニア層のエネルギーというものの活用がまだまだ不足かなという気がします。

意識のある方はいろいろなことをやっているのですけれども、おおよその方は自分のことだけ考えて、とにかく健康で安全で幸せな暮らしがしたいと思っていると思うのです。貢献するというか自分の命を他人のためにも使う。ただ動いていたり、生きているのでも、自分のために使うのと、人のために使うのと、そんなに違わないわけで、も

もう少し多目的に人生を楽しめるような施策があれば、大事な大事な眠っているリソースがもっと生かせるのではないかというふうに思っていますので、その辺も何か文字として一つ入れていただければありがたいかなと思います。

(山岡委員長) ここは取り組みの方向性なので、それに合わせて実際どういう事業をやるかということがより肝心になってくるわけです。だから、この段階で意見をなかなかおっしゃりにくいという感じのところはあるかもしれないです。

(林委員) コロナ対応ということで1つ大きなものとして、IT環境の整備というものがあるんじゃないかなと考えています。具体的にいいますと、例えば市民センターとかですと、CITY Wi-Fi というものが入っておりますが、非常につながりが悪いといえますか、時間の制限があったりします。今Zoomを教えてほしいとか、そういう相談もたくさんありますけれども、ご本人がネットにつながらないと、本当に使えなくて、どうしましょうかということがあったりします。なので、これは完全に他課との調整にもなってしまいますけれども、2-②「市民活動を行う場所の確保」に加えて、IT環境、つながる環境の確保というのも入っているといいのかなと思いました。

(坂井副委員長) この枠組みの中からはみ出してしまう話かなと思って発言を控えていたのですが、一応申し上げます。

「若い世代へのアプローチ」というのを非常に意識して取り組んできていると思うのです。学生を考えた場合、大学のサークル活動というのはありますけれども、その活動は続いているんですが、人はどんどん入れかわっているんですね。でも、若い人はそれでもいいんじゃないかなと私は思っています。若いときにそういう経験をするということが将来の糧にもなるので、そういうあり方もあるだろうな。

例えばNPO法人をつくって、その人がずっとそれにかかわっていきなきゃいけないというようなことだと、非常に窮屈になってしまう。それよりも、どんどん新陳代謝を図りながら、そういう取り組みがずっと受け継がれていくというスタイルですね。大学のサークルみたいなスタイルでも、若い人の活動としては全然いいのではないかと考えているんです。それが1つ。

あと、先ほど鎌倉委員もおっしゃられたのですが、シニアのボランティアというか、活動というのをもっと促進するというのはとても大事な。シニアの場合は、若い人と逆に、だんだん時間の余裕ができてくるということがありますし、今のシニアはとにかく元気です。70代でも80代でも全然元気なので、ずっと活動できると思うのです。

活動するということがまた元気につながるので、それは市の健康長寿やまちづくりにもつながっている話だと思います。その部分がこの枠からはみ出てしまうのかなと思っていたのですけれども、そういうことも今後考えていったらいいんじゃないかなと思います。ですから、シニアで、今まで会社人間で地域と全然つながりを持っていなかったような人が、地域とつながれるようなきっかけづくりの支援の取り組みみたいなものがあったらいいかなと思いました。

(樋口委員) 原田委員がおっしゃっていたコロナ禍のことで、うちの社協はコロナ禍で経済的な困窮に陥っている方たちの貸し付けの窓口をやっているせいもあるのですが、これからますます深刻化していく生活の困窮みたいなものが、これまで活動ができていたそういう層にも、今後打撃が及んでいく可能性がある中で、市民活動していた人たちにそういう打撃がいったときに、それが十分予測される中では、その中でもできる活動というような、現実をしっかりと捉えた計画の見直しみたいなことは必要だなというふうに思います。

(事務局) この計画自体の見直しは、再来年が本格的な改定の年になります。

(山岡委員長) 今おっしゃっていただいたようなことは、基本施策とか取り組みは変わらないけれども、事業に落としていくときに、現実に合わせて事業をちゃんとつくっていくということですね。

(樋口委員) はい、そうです。

(山岡委員長) この取り組みのレベルでコロナに対応して何か変えなければいけないところはそんなにたくさんはないかもしれないですね。もちろんそうしなきゃいけないところはたくさんあるにはあるのですけれども、計画に落とし込んでいくときに、今までどおりの事業計画にしていたら、全然そぐわないということですね。そこが結構大事なところですね。とはいえ、この取り組みの方向性のところで、きちんと指針を合わせていく必要があるところも当然ある。進むべきところを確認していく必要があるところもあると思うのです。

これはまだ時間がありますし、メールでは来ていましたけれども、十分読み込めてないところもあると思います。後でご意見を事務局にメールしていただくことも可能だということですので、取り組みのところについて、もう少しこういう視点やこういう方向性も打ち出したほうがいいんじゃないかということがもしあれば、おっしゃっていただくということでもよろしいですかね。

実際の計画は、先ほどもあった結果報告とあわせてということになるんですかね。  
(事務局) アンケート調査の結果を捉えて記載をさせていただきますし、加えて申し上げますと、今までこの計画のいわゆるA3のシートには、市民自治推進課のほか、あとは推進センターだったり、プラザさんの取り組みを中心に記載させていただいたのですが、庁内各課の取り組みを見ると、いろいろな課が市民活動を応援するような施策をやられていらっしゃる。そういったところも、これから先、調整をする中で、例えば先ほどおっしゃった空き家の部分とか、住宅政策は実際補助金を持っていたりしますので、そういった部分も可能な限り記載できるような形で、今後も取り組みの事業を記載していきたいと考えています。

また、記載する内容は、もちろん新しい生活様式ですとか、コロナの対策を踏まえた事業として、それぞれの所管課は確実にそれを踏まえた上でやることとなりますので、そういった結果を踏まえて、具体的には第6回、第7回でお示しをしながら、最終的なシートをつくっていきたいと考えているところでございます。

(山岡委員長) 特に市民活動などは枠組みを超えてかかわってくるところがたくさんある。福祉部局とか、きょうの話だと、もしかしたら産業部局もあると思いますので、そういうところも含めてわかるようにしていただけるというのはすごくよいことかなと思います。大変だと思いますし、見るほうも大変かもしれないんですけども、それも大事なことだと思うので、この領域に関しては、あまり縦割りにしない方向でやれたらというふうに私は思います。

今回この議題はこれだけなので、よろしいですか。もしご意見があれば、皆さんから事務局のほうに提出していただくということで、議題(2)「令和3年度に向けた取り組みについて」を終了いたします。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

### 議題(3) その他

(山岡委員長) それでは、議題(3)「その他」について、事務局より説明をお願いいたします。

(事務局) それでは、事務局より次回の委員会の日程についてご案内させていただきます。

今回は、年明け1月30日(土)の10時から第5回の推進委員会として、ミライカナエルサポート事業協働コースの二次審査と、スタート支援コース及びステップアップ

支援コースの中間報告会を予定しております。

詳細につきましては追ってご連絡をさせていただきますが、本日同様、午後までお時間をいただくことを予定しておりますので、お忙しいところを大変恐縮ですが、ご出席いただけるよう、どうぞよろしく願いいたします。

また、コロナの感染状況がいわゆる第3波とも言われている中で、これから先12月、1月とも見通せない中の状況でもございますので、そういった部分につきましては、その都度、感染状況を踏まえて、対応等、ご案内をさせていただきます。

私からは以上でございます。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

## 閉会

(山岡委員長) そうしましたら、これで本日の日程が全て終了しました。

以上をもちまして第4回藤沢市市民活動推進委員会を閉会いたします。本日は大変お疲れさまでした。

午後1時7分 閉会